「死＝生」に向き合おうとする子どもたち

先の「生死の極限状態のときに自らの命を客観視する凄さ」の記事を目にしてくれた数人から、感想メールをいただいた。

共通して、いわゆる健常者と難病の方の「覚悟しなければ生きられない現実を突きつけられきたのか？命の向き合い方が違うのかなあ～。」というものであった。

この側面を考える参考になるかどうか分からないが、現職時代の次のようなことを思い出す。

筋ジスの中学生担当のスタッフが「子どもたち数人が登校拒否をし出した。」と相談に来きたので、「理由は？」と聞くと、「子ども達が『生きるって、どういうこと？』と先生方に聞いても何も話してくれないので、学校に行ってもつまらないから…。」とのこと。

「そういう理由なら、当分無理に登校させることはない。先生方に反省し考える機会を与えればいい。」と応えた。

つまり、筋ジスの子どもたちは正に「死＝生」に向き合おうとしているのに、教師（大人）が応えることが出来ないのは、教師（大人）が自分の生に向き合っていないから言葉をなくしてしまうのでないかと思ったから。

もちろん直ぐに校長室に出向いて、「筋ジスの子どもたちのこの問題に向き合うことこそ、難病の子どもたちを対象とするこの学校の存在意味であり、特色ではないのですか？教師（大人）は、この問いから逃げずに子どもたちの心の叫びと向き合ってください。」と申し入れた。

中学生年代からは、誰もが自らのアイデンティティーに戸惑い出す正に思春期。

まして、難病の彼らは病院内で同じ病気の先輩の死に接する機会も多く、なおのこと具体的に自らの「死＝生」に向き合わざるを得ないのでないだろうか。

我々は長生きするものとつい無意識に思っているから、そう自らの「死＝生」に向き合わずに過ごしているといえなくもない。

だが、今回の大震災で「死＝生」に向き合っている方々も多いと思う。

阿部幸泰　　（2011 年 6 月 12 日　記）